LEVEL 5

Web Tadoku Books

まだらの紐（ひも）

原作（げんさく）：コナン・ドイル

朗読音声のダウンロード
Audio download

★読む前に　Before you read

《多読の読み方》

多読とは、とてもやさしい本から楽しくたくさん読んで日本語を身につけていく方法です。

次の4つのルールを守って楽しく読みましょう。

1. やさしいレベルから読む
2. 辞書を引かないで読む
3. わからないところは、とばして読む
4. 進まなくなったら、他の本を読む

《How to do Tadoku》

Tadoku recommends that everyone should start with very easy books and enjoy a lot of them following the 'Four Golden Rules' below.

1. **Start from scratch.**
2. **Don’t use a dictionary.**
3. **Skip over difficult words, phrases and passages.**
4. **When the going gets tough, quit the book and pick up another.**

〈この作品について〉

みなさん、探偵シャーロック・ホームズを知っていますか。

シャーロック・ホームズが出てくる推理小説は、今から百年ほど前にイギリスの小説家アーサー・コナン・ドイル（一八五九～一九三〇年）によって書かれました。

ロンドンにあるホームズの家には、事件で困っている人たちが訪ねてきます。ホームズはその人たちから話を聞き、事件が起こった場所に出かけます。そして、友達のワトソンに手伝ってもらいながら、どんなに難しい事件でも解決してしまいます。

ホームズの話は世界中で愛され、今もたくさんの人に読まれています。この『まだらの紐』は、六十あるホームズの話の中でも、とても人気がある作品です。他に『赤毛クラブ』も有名で、多読用図書「にほんご多読ブックス　vol.6」（大修館書店）にも収録されています。

一

ある朝僕が目を開けると、ベッドの横にシャーロック・ホームズが立っていた。時計を見るとまだ七時十五分だ。ホームズがこんなに朝早く起きているのは珍しいことだった。

ホームズは言った。

「ワトソン、こんなに早く起こして申し訳ない。実は若い女性が突然やってきて、相談があると言っているんだ。何か事件があったんだろう。君も話が聞きたいだろうと思って、それで起こしたんだよ」

「それじゃあ、寝ていられないな。僕もその女性に会うよ」

その頃僕は、ホームズといっしょにロンドンのアパートに住んでいた。医者の仕事をしながら、時々ホームズを手伝っていたのだ。

ホームズと僕が部屋へ入っていくと、窓の近くに座っていた女性が立ち上がった。黒い服を着て、ベールのついた帽子をかぶっている。

「ずいぶん朝早くいらっしゃいましたね」
ホームズは明るい声で言った。
「私がシャーロック・ホームズです。こちらは友人のワトソン。さあ、どうぞ。熱いコーヒーでもいかがです？　寒いんじゃありませんか」
「いいえ。寒くはありません。怖いんです、ホームズさん。私はとても怖いんです」
こう言いながら女性はベールを取った。
すると、不安そうな青い顔が見えた。
髪は少し白く、疲れているようだった。
ホームズは落ち着いた声で言った。

「大丈夫です。心配いりません。私が必ずお助けしますよ。今朝は駅まで田舎道を歩いたんでしょう？ そしてそこから、汽車に乗ってここまでいらっしゃった。そうですね？」

「えっ？ どうしてわかるんですか？」

「左手に帰りの切符を持っていらっしゃる。それなら、今朝も汽車で来たんでしょう。それに、靴にもドレスにもたくさん土が付いている。ロンドンの道を歩いてもこうはなりません。田舎道を歩いていらっしゃったということです」

「ホームズさんのおっしゃる通りです。今朝は六時前に家を出ました。歩いて駅まで行って、朝一番早い汽車に乗ってここへ来ました。ああ、ホームズさん、どうぞ私を助けてください」

「何があったのか全部話してくださいませんか」

「ええ…。でも、何を怖がっているのか、はっきり話すことは難しいんです。私が変だ、おかしい、と思っているのは、とても小さなことなんです」

「大丈夫です。どうぞ、最初から話してください。ワトソン、メモを頼むよ」

僕はメモを取り始めた。

「私はヘレン・ストナーと言います。今は父と二人で暮らしています。父と言っても本当の父親ではありません。私の母が再婚した相手なんです。父はサリー州ストークモランの、ロイロット家の人間です」

「ロイロット家ですね。私も知っています」

「父の家は昔からとても金持ちで、土地をたくさん持っていました。でも、だんだん貧乏になって、今では土地が少しと古い家があるだけになってしまいました。父は何かしっかりした仕事を持たなければならないと考えて、医者になってインドのカルカッタに行きました。そこで医者として有名になったんです。ところがある時、事件を起こしてインド人を殺してしまって、警察につかまりました。そして長い間刑務所にいた後でロンドンに帰ってきたのです。

父はロンドンで私の母と知り合って結婚しました。姉が四歳、私が二歳の時のことです。母は前の夫、つまり私たちの本当の父親からたくさんのお金を受け継いでいたので、生活に困ることはありませんでした。何年か経って、母は事故で亡くなりました。父は私たち二人の娘を連れてサリー州の古い家に戻って、今もそこに住んでいます。母が亡くなってからは、

父が母のお金を受け継いで、それで十分に生活することができました。

ところが、母が亡くなってから父は変わってしまったんです。最初、村の人たちは『ロイロットさんが帰ってきた』と喜んでいました。でも父はその人たちとはつきあわないで、ほとんど家の外に出ませんでした。たまに外に行っても、すぐに村の人たちとけんかをして、怒り始めると誰もそれを止めることができません。何度も警察につかまって、みんなが父を見ると逃げるようになりました。

おわかりになるでしょう？　私と姉ジュリアの生活は、楽しいものではありませんでした。使用人も、父が怖くてすぐに辞めてしまいます。ですから、料理も掃除も洗濯も、ほとんど姉と二人でやっていました。姉が死んだのは三十歳の時でしたが、姉の髪も私のように少し白くなっていました」

「それでは、お姉さんは亡くなったんですね？」

「はい。姉は二年前に亡くなりました。私がお話ししたいのは、姉のことです。私たちはほとんど人に会わずに暮らしていたのですが、母の妹でハローの近くに住んでいる叔母とだけ、年に

一度会っていました。姉は二年前のクリスマスに叔母の家に行って、若い男の方と知り合いました。二人は愛し合うようになり、すぐに婚約しました。父はこの結婚に反対しませんでしたが、結婚式の二週間前に事件が起こったのです」

ホームズは椅子に座って目を閉じていた。そして、言った。

「どうぞ、全部話してください。小さなことも、全部」

「姉が亡くなった晩、私たちは、私の部屋で結婚式のことを話していました。十一時頃になって姉は立ち上がって、言いました。

『ヘレン、あなたは夜中にヒューっていう口笛のような音を聞いたことがある？』

『いいえ、一度もないわ。姉さんは、聞いたの？」

『最近何日か続けて、明け方の三時頃、聞こえるのよ。ヒュー、ヒューっていう音が。いつもそれで起きてしまうの。どこから聞こえるのか、わからないんだけど・・・』

私は一度もそんな音を聞いたことはありませんでした。姉はすぐに笑って、

『そう。私の聞き違いかもしれないわ』

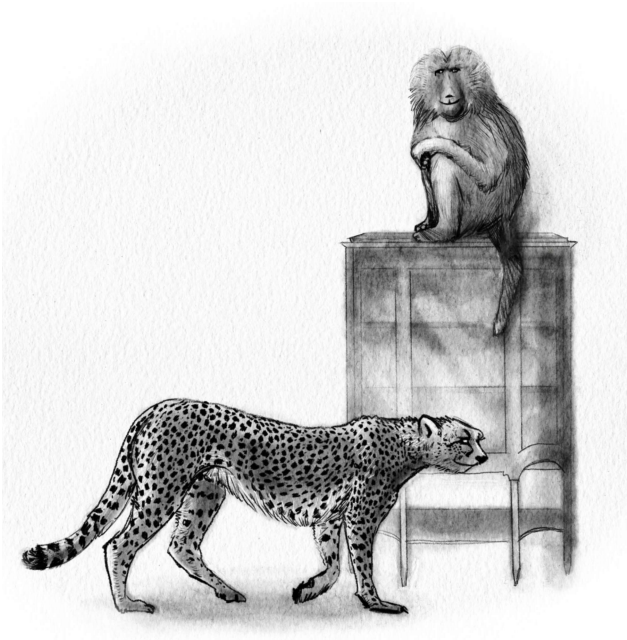
と言いました。姉は私の部屋を出て自分の部屋に戻りました。姉の部屋のドアが閉まり、姉が鍵を閉める音が聞こえました

「部屋の鍵をかけるんですか？ どうして？」

とホームズは言った。

「言い忘れていました。父は動物を飼うのが好きで、ヒヒとチーターを飼っているんです。インドから連れてきました。ヒヒもチーターも、庭や家の中を自由に歩き回っているので、私も姉も、いつも鍵をかけていたのです。

その夜はひどい天気でした。風が吹いて、雨が窓に当たる音がしていました。突然、叫び声が聞こえたのです。恐ろしい声。姉の声でした。私は自分の部屋のドアを開けて廊下に出ました。その時、ヒューっという口笛が聞こえたような気がします。そしてその後、何か固いもの



が落ちたようなガチャンという音が聞こえてきました。

私が姉の部屋のドアの前に立つと、ドアがゆっくりと開きました。出てきたのは、姉でした。姉の顔は真っ青で、すぐに倒れてしまいました。どこか痛いのか、苦しそうに体を曲げました。そして、言ったのです。

『ヘレン、紐だったわ・・・。まだらの紐・・・』

そして、父の部屋の方を指さしました。私は走って父を呼びに行きました。父は急いで出てくると、姉にブランデーを飲ませました。でも、すぐに姉は亡くなってしまったのです」

「ヘレンさん。口笛と、何かが落ちた音を聞いたのは、間違いありませんか？」
「聞いたと思います。でも、雨や風の音がひどかったので、聞き間違えたかもしれません」
「お姉さんは何か持っていましたか？」
「左手にはマッチの箱を、右手には火の消えたマッチを持っていました」
「お姉さんは何か危険だと思って、マッチに火をつけたんですね。警察はどう考えたんですか？」
「警察も父のことはよく知っていましたから、父が犯人ではないかと思ったようです。でも、何も問題はなかったんです。姉の部屋のドアには鍵がかかっていました。窓も閉まっていて、そこから人が入ったということはありません。あの時姉は一人で部屋にいて、そして死んでしまったんです。体にも傷はありませんでした」
「毒はどうですか？ 何かの薬を飲まされて死んだということはないでしょうか？」
「いいえ、それも警察が調べましたが、何もわかりませんでした」
「それでは、お姉さんはどうして亡くなったんです？ あなたの意見を聞きたいですね」

「姉は何か怖いものを見て、そのショックで死んだんです。それ以外に理由は考えられません」

「お姉さんが『まだらの紐』と言ったのは、どういうことです？」

「私には、わかりません」

ホームズは、困ったというふうに首を振った。

「それから二年経ちました。以前はいつも姉と二人でした。今では一人ぼっちです。でも、一か月前、私もある男の方と知り合って、結婚することにしました。今回も父は反対しませんでした。私はもうすぐ結婚します。でも、そのことが決まった二日後、私の部屋の屋根が壊れたと父が言って、工事を始めたんです。私は自分の部屋を使うことができず、父に言われて姉の部屋で眠ることになりました。姉が死んだ、あの部屋です。それはとても怖いことでした。そして昨夜、私は聞いたのです。あの口笛を。姉が死んだ時に聞いた音と同じです。私は驚いて起きて、明かりをつけました。そして、急いで服を着て空が明るくなるのを待って、森の中を駅まで歩いて、汽車に乗ってロンドンに来たのです」

ホームズはしばらく何も言わないで考え込んでいた。そして、口を開いた。
「これは難しい事件だ。急がなければいけない。今日ストークモランのあなたの家に行ってもいいですか。あなたのお父さんに会わないように行くことは、できるでしょうか」
「父は今日何か用事があって出かけると言っていました。夕方まで大丈夫だと思います」
「それはちょうどいい。では、あなたは先に帰ってください。私たちは少し仕事をしてから、あなたの家に行きますから」
「わかりました。それでは家でお待ちしています。ホームズさんにお話しして、気持ちが軽くなりました。」
ヘレンはそう言って、来た時とは違う明るい顔で部屋を出ていった。

二

「どう思う？ ワトソン」
僕と二人になるとホームズは言った。

「ヘレンが聞いたガチャンという音は、窓を閉めた音だったんだと思うよ。犯人は窓から入ってきて、また外へ出たんだ。そして、何か特別な方法で、窓の鍵を閉めたんだよ」
「それは無理だよ。窓には何も問題はなかったんだから」
「じゃあ、どうやって犯人は部屋に入ったんだ、ホームズ」
「わからない。だからこれから、ストークモランに行くんだ」
その時、突然ドアが開いて、大きな男が入ってきた。男は黒い帽子をかぶり、長い上着を着ていた。男は怒っていた。人を殺しそうな恐ろしい目をしていた。
「どっちがホームズだ！」
「私ですよ。私が、ホームズです。何かご用でしょうか」
ホームズは静かな声で答えた。
「私はストークモランのロイロットだ。さっきまでここに娘が来ていただろう。何を話したんだ！」
「ロイロットさん、寒いですから、どうぞ中へお入りください」

「何を話したのか聞いているんだ、ホームズ！」

「まあ、お座りください、ロイロットさん」

「娘が何を話したとしても、今後、私にも娘にも近づくなよ。近づいたら、おまえもこうなるぞ！」

ロイロットはホームズのステッキを手に取ると、それを折ってしまった。

「気をつけろよ。私は危険な男だからな！」

そう言って折れたステッキを暖炉に投げ入れ、部屋を出ていった。

「驚いたな、ワトソン。あれがヘレンの父親か。家に行く前に、ロンドンで会ってしまった。しかたがない。まず朝ご飯を食べよう。それから僕は役所に行くよ。少し調べたいことがあるんだ」

一時頃、ホームズが役所から帰ってきた。

「ヘレンのお母さんのお金のことを調べてきた。二人の娘が結婚するまで、お金はロイロットが管理することになっている。でも、結婚したら、二人は年二百五十ポンドずつもらう。そうなったらロイロットにはほとんど残らない。しかし、結婚する前に二人を殺してしまえば、お金は全部ロイロットのものになるんだ。ワトソン、急がないと、ヘレンも危ないぞ。ヘレンはもうすぐ結婚すると言っていたからな。さあ、ピストルを持って出かけよう。あんな男がいる家に行くんだ。ピストルは必要だよ。あとは歯ブラシがあれば、大丈夫！」

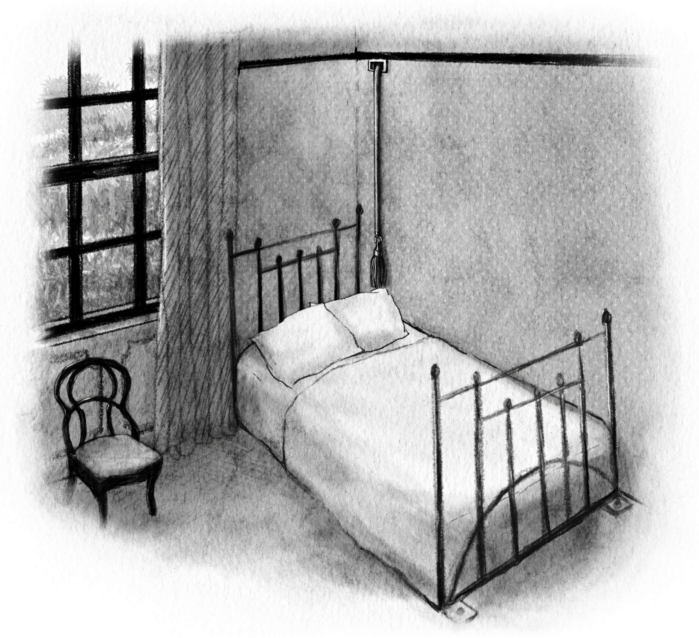
三

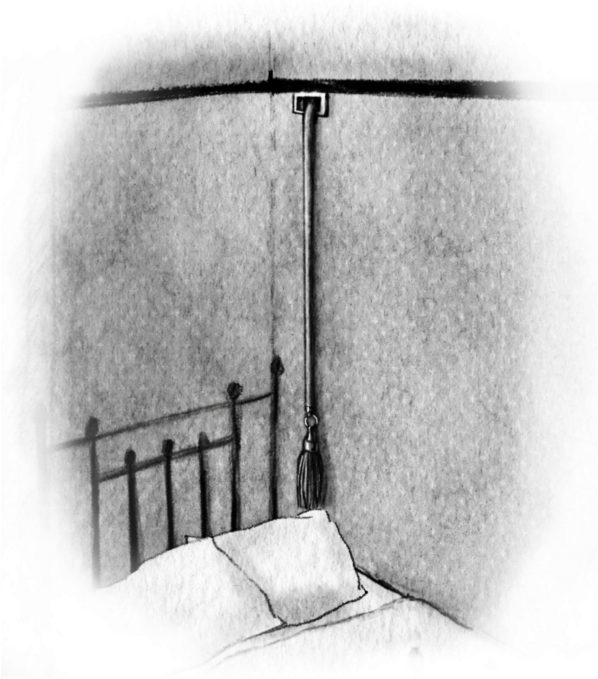
僕たちは汽車に乗ってストークモランに向かい、駅で降りてそこから馬車に乗った。とてもいい天気で、木々の緑が美しかった。こんな平和な村で、本当に殺人事件が起こったのだろうか。その時、森の向こうに大きな家の屋根が見えた。それがロイロットの家だった。家の前で馬車を降りると、家の方からヘレンが走ってきた。

「約束通り来ましたよ。ヘレンさん」
「ホームズさん、ワトソンさん、早かったですね。ちょうどいいです。まだ、父は帰っていません」
「そうですか。でも、お父様にはロンドンでお会いしました」
「え？　父に会ったんですか？」
ホームズは、ロイロットがホームズの家に来た時の様子を話した。
「さあ、お父さんが帰る前に、急いで調べましょう」

家は、古くてとても大きかった。案内してくれたヘレンに、ホームズは言った。

「ここがあなたの部屋ですね。急いで工事をしなければいけないようには見えませんね」
「工事の必要はないんです。父は私に、姉が亡くなった部屋で寝てほしい。それだけです。理由はわかりませんが」
「なるほど。それではお姉さんの部屋の窓を閉めてください。私たちは外から窓が開けられるかどうか、やってみましょう」
僕たちは外に出て窓を開けようとした。しかし、だめだった。
「だめだよ、ワトソン。犯人は外からこの部屋に入ることはできない。部屋に戻ろう」
ホームズは姉ジュリアが亡くなった部屋に入っていった。ジュリアの部屋はヘレンの部屋とロイロットの部屋の間にある。部屋の中にあるのは、箪笥と





ベッド、化粧台、そして二つの椅子だけだった。ホームズは部屋の中を丁寧に調べた。ベッドの横に下がっている長い紐を手に取って、ホームズは言った。

「この紐を引くと、どこかでベルが鳴るんですね。どこで鳴るんですか」

「使用人の部屋で鳴ります。二年前に父がこの紐を付けさせたんです」

「お姉さんが、そうしてほしいと言ったんですか」

「いいえ。姉は何でも自分でしていましたから、この紐を使ったことはないと思います」

「なるほど。この紐は必要なかったということだ・・・」

ホームズは次に床や壁を丁寧に調べ、最後にベッドの横の紐を持って強く引いた。

「何だ、この紐は！　通気口に結んであるだけじゃないか。これを引いても、ベルは鳴らないよ！」

ホームズはそう言って、もう一度紐を引いてみた。

「ほら、この紐は何の役にも立たない・・・。この部屋には他にも変なことがある。ワトソン、この通気口を見てくれ。普通、通気口は家の外のきれいな空気を部屋に入れるために作る。でも、これは違う。隣りのロイロットの部屋につながっている。これじゃあ、役に立たない」

「その通気口も、その紐と同じ頃に新しく付けたんです」

「不思議だね。ぜんぜん役に立たない紐と通気口。ヘレンさん、次はお父さんの部屋を見せてください」

ロイロットの部屋は娘たちの部屋よりも大きかった。ベッド。医学の本が並ぶ本棚。りっぱな椅子。窓のそばの小さな木の椅子。丸いテーブルと大きな金庫。部屋の中にあったのは、これだけだった。ホームズはゆっくりと部屋の中を歩き、家具を一つずつ調べた。そして、金庫につ

いてヘレンに聞いた。
「この中には何が入っているんですか」
「父の、何か大切な書類だと思います」
「この中に猫がいるんじゃないですか」
「まあ、そんなことはありません！　金庫の中に猫なんて！」
「でも、これを見てくださいよ」
ホームズは金庫の上に置いてあるミルクの入った小さな皿を持ち上げた。
「いいえ。猫を飼ったことはないです。お話ししたように、ヒヒとチーターはいますが」
「ああ、そうでしたね。でも、ヒヒもチーターも、こんな小さな皿のミルクでは足りないでしょう」

その時、ホームズはテーブルの上に小さな鞭が置いてあることに気づいた。鞭の紐の部分は丸く結ばれていた。

「これは、何だろう、ワトソン」

僕には全然わからなかった。

「ヘレンさん・・・。これは普通の事件じゃありません。すばらしく頭のいい男が、その頭を使って、誰にも考えられないような恐ろしい計画を立てたんです」

僕たちはもう一度庭に出た。ホームズは下を向いて考え込んでいた。僕とヘレンは、何も言わずに待っていた。やっと顔を上げたホームズは言った。

「ヘレンさん、よく聞いてください。この後、私の言う通りにすると、約束できますか」

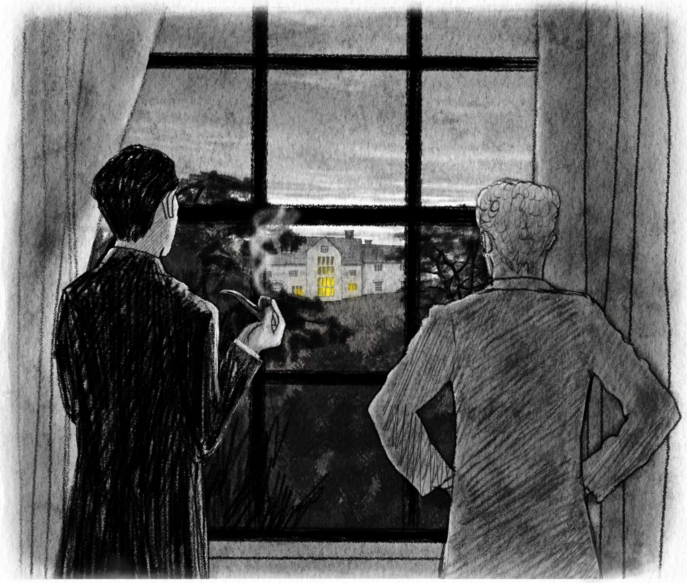
「はい。約束します」

「今晩危険なことが起こりそうなんです。私の言う通りにしないと、あなたは死んでしまうかもしれません」

そう言うと、ホームズは遠くに見える建物を指さした。

「あの建物はホテルですね」
「ええ、そうです。クランクホテルと言います」
「あそこから、あなたの部屋が見えますよね。私たちはこれからあのホテルに行きます。あなたは、お父さんが帰ってきたら頭が痛いと言って部屋に入ってください。お姉さんが亡くなったあの部屋です。そして、夜になってお父さんが自分の部屋に入ったら、ランプに火をつけて窓の近くに置いて、窓の鍵を開けてください。そして、お金と必要なものを持って、元のあなたの部屋へ行くんです。今工事中ですけど、一晩くらい、いられるでしょう」
「はい。大丈夫です」
「その後は、ただそこで待っていてください。私たちはその間にホテルからこの家に戻ってきて、口笛の原因を調べます」

ホームズと僕は、クランクホテルですぐ部屋に案内してもらうことができた。その部屋は二階にあって、窓からロイロットの家を見ることができた。夕方になり、ロイロットが馬車に乗って



帰ってきて、部屋に明かりがつくのが見えた。

ホームズはその明かりを見ながら言った。

「ワトソン、今夜の仕事は危険なものになりそうだ」

「君を助けられるなら、危険でも僕は行くよ。でも、ホームズ。あの家にどんな危険があるのか、僕にはわからないな」

「君も通気口を見たね。あの役に立たない通気口」

「ああ。でも、ネズミも通れないような小さな穴だよ。あれにどんな問題があるんだ？」

「おかしいのは、あの通気口と、役に立たない紐を、同じ時期に、同じ場所に付けたということだよ。その後、ベッドで寝ていた女性が亡くなったんだ。あのベッドは、動かないようになって

いた。ベッドを動かすことができないから、あの紐と通気口はいつもベッドの上にあったということだ。紐はベッド上の枕に届いていた」

「ホームズ、犯人の計画が少しわかってきたよ。恐ろしい・・・」

「そうなんだよ。頭のいい医者が悪いことをしようとしたら、危険なことになる。ワトソン、今夜僕たちは大変な男と戦うんだ。今はゆっくり休もう」

九時頃、遠くに見えていたロイロットの家の明かりが消えた。家の辺りは真っ暗になった。それから二時間が過ぎ、時計が十一時を知らせた時、突然ロイロットの家の辺りにまた明かりが一つついた。

「私の計画通り、ヘレンがランプに火をつけたようだな。あれは、真ん中の部屋の窓のところだ」

ホームズは立ち上がりながら言った。

「さあ、行こう」

四

ロイロットの家の庭には簡単に入ることができた。私たちが木々の間を通って家の方へ歩いている時、後ろから子どものような形をした黒いものが飛び出してきた。長い手足を使って草の上を走り、逃げていく。ホームズは驚いて、思わず僕の腕を強い力でつかんだ。だが、すぐに僕の耳の近くで低く笑い出した。

「何だ。あれは、ロイロットの大事な家族だよ。ヒヒだ。インドから来たサルだよ」

僕はロイロットが飼っている動物のことをすっかり忘れていた。ヒヒが庭を走り回っているのだから、チーターも出てくるかもしれない。

僕たちは静かに窓を開けて、ジュリアが亡くなった部屋に入った。ホームズはランプをテーブルの上に置き、部屋の中を見回した。そして、小さな声で言った。

「ワトソン、絶対に音を出すな。通気口から光が見えてしまうから、ランプも消すよ。暗くなるが絶対に眠ってはだめだ。ピストルを用意して、その椅子に座っていてくれ。僕はこの棒を持って、ベッドに座る」

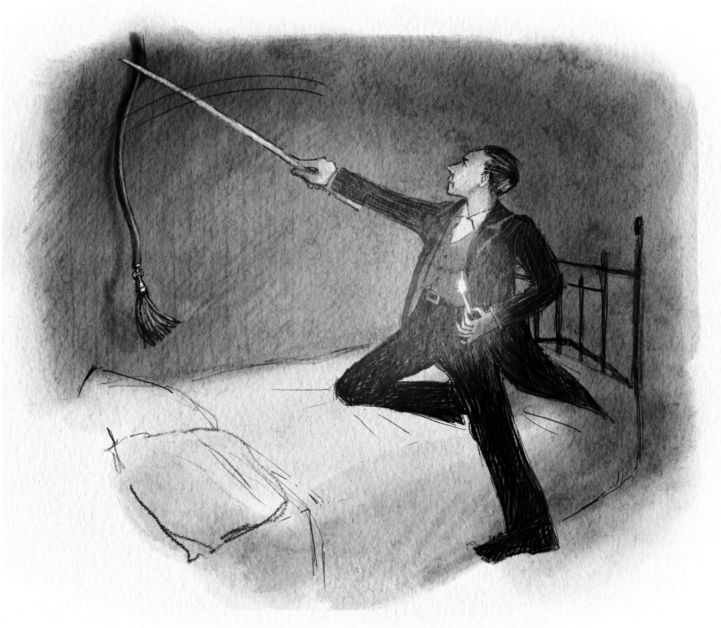
ホームズはベッドに座ると、マッチとろうそくを横に置き、ランプの火を消した。部屋は真っ暗になった。

何の音も聞こえず、何も見えなかった。しかし、少し離れた所にホームズがいることは感じられた。時々、猫のような鳴き声も聞こえた。ロイロットが飼っているチーターが、庭を歩いているのだ。十五分に一度、遠くで教会の鐘が鳴った。十二時になった。一時、二時、三時…。僕たちは待った。

突然、通気口の向こうに小さな光が見え、油が燃える臭いが流れてきた。隣りの部屋で誰かがランプに火をつけたのだ。人が動く小さな音が聞こえ、臭いがどんどん強くなってきた。

三十分ほどじっと座って待っていると、今度は「シュッ、シュッ」という小さな音が聞こえてきた。すると、ホームズがベッドから立ち上がり、マッチに火をつけた。そして、手に持っていた棒でベッドの横の紐を何度も激しくたたいた。

「見たか？ ワトソン」



ホームズが言った

「あれを見たか？」

しかし、僕には何も見えなかった。ホームズがマッチに火をつけた時、ヒューっという口笛は聞こえた。しかし、ホームズが何をたたいたのか、僕には見えなかった。僕が見たのはホームズの顔だけだった。その顔は真っ青で、何か恐ろしいものを見てしまったようだった。

ホームズは棒で紐をたたくのを止めて、通気口を見ていた。その時突然、恐ろしい叫び声が聞こえてきた。その声はどんどん大きくなった。苦しさと怒りがいっしょになった恐ろしい声だった。僕は立ったままホームズを見つめていた。ホームズも僕を見つめていた。突然声は消え、また静かになった。

「今のは、何だ？　何が起きたんだ、ホームズ？」
「終わったということだ。全部、終わった・・・」
ホームズが答えた。
「たぶんこれが一番いい方法だったんだ。さあ、ワトソン、ロイロットの部屋へ行こう。ピストルを忘れないで」
ホームズはランプに火をつけて、廊下に出た。ロイロットの部屋のドアを二回ノックしたが、答えはなく、ホームズはドアを開けた。

ロイロットの部屋の真ん中にはテーブルがあり、その上でランプが光っていた。そして、テーブルのそばにロイロットが座っていた。長いガウンを着て、足には赤いスリッパをはいている。手には昼間見た、あの不思議な鞭を持っていた。目は大きく開いて上を見上げ、頭には黄色いまだらの紐が巻き付いていた。ロイロットは何も言わず、静かにそこに座っている。死んでいた。

「紐…。紐だ」

ホームズが小さな声で言った。

僕はロイロットに近づいた。すると、ロイロットの頭の紐が動いた！ そして、小さな蛇が髪の中から頭を出した。

「これは、インドの蛇だ！ この蛇にかまれたら、すぐに死んでしまう。さあ、蛇を家に帰してやろう。そして、ヘレンを安全な場所に連れていってから、警察に連絡しよう」

そう話しながら、ホームズはロイロットの手から鞭を取って、それで蛇を持ち上げ、金庫の中に入れてドアを閉めた。

ストークモランで起きたロイロットの事件はこうして終わった。警察は長い時間をかけて事件を調べた。その結果、ロイロットは、飼っていたインドの蛇と遊んでいて、かまれて死んでしまったのだと考えた。

五

ロンドンへ帰る汽車の中で、ホームズはもう少し僕に説明してくれた。

「動かせないベッド。その上に下がっている紐。役に立たない通気口。この三つを見て僕が考えたことは、昨日話したね。あの紐は、何かが通気口を通って隣の部屋からベッドまで来るための、橋のようなものだったんだよ。それじゃあ、何がこの橋を渡って、ベッドまで来たのだろう。僕はすぐに蛇のことを考えた。ロイロットはインドからヒヒやチーターを連れてきていた。蛇も手に入れることができただろう。それに、医者だから、蛇の毒のこともよく知っている。蛇にかまれて人が死んでも、イギリスの警察はそのことに気づかないよ。そんな事件はこの国では起こらないからね。

次に僕は、口笛のことを考えた。隣りの部屋に行った蛇が、誰かに発見される前に戻ってこないと、ロイロットは困ったことになる。どうすればいいと思う？ ロイロットは口笛で蛇を呼んだんだ。そして、蛇が戻ってきたら、ミルクをやったんだろう。でも、蛇が隣りの部屋に行っても、必ず寝ている人間をかむかどうかはわからない。たぶん、ロイロットはうまくいくまで何回もやってみたんだろうね。それで、ジュリアは何回も口笛を聞いたんだ。

ロイロットの部屋の金庫や皿のミルク、あの鞭を見て、僕はこの計画を理解した。ヘレンが聞いたガチャンという固いものが落ちる音は、蛇を金庫に入れてドアを閉める音だったんだろう。蛇の出すシュッシュッという音を、昨日君も聞いただろう。あの音を聞いてすぐにぼくはマッチの火をつけて、紐の上にいた蛇をたたいた」

「それで、蛇は壁の通気口からロイロットの部屋に戻っていったんだね」

「ああ。そして、そこにいた主人のロイロットをかんだんだよ。僕にたたかれて怒った蛇は、最初に会った人間をかんで、殺してしまったんだ。だから、僕のせいでロイロットが死んだと言うこともできる。悪いことをしたとは全く思わないけどね」

まだらの紐(ひも)

～The Adventure of the Speckled Band

発行年月日：2023年12月5日

原作：アーサー・コナン・ドイル Arthur Conan Doyle
簡約：宮島(みやじま)京子(きょうこ)
挿絵：池田(いけだ)あきつ
監修：NPO多言語多読

TADOKU Supporters NPO多言語多読

tadoku.org

この作品はクリエイティブ・コモンズ表示–非営利–改変禁止4.0国際ライセンスの下に提供されています。
This book is licensed under CC BY-NC-ND 4.0
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/